

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：32646

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02120

研究課題名(和文) アンリ・デュティユー研究：20世紀ポスト調性音楽におけるシステムと自由の問題

研究課題名(英文) Henri Dutilleux In the Context of Post-Tonal Creative Issues: Between Freedom and Control

研究代表者

藤田 茂 (Fujita, Shigeru)

東京音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：30466974

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀の最重要作曲家のひとりアンリ・デュティユーの5つの管弦楽作品(《第2交響曲》《メタボール》《遙かなる世界が》《音色・空間・運動》《瞬間の神秘》)について、スケッチ研究と理論研究を循環させることで主に次の結果を得た。これらは「独立独歩」という従来のデュティユー・イメージを覆す。アンチ・セリアリストと見なされてきたデュティユーが実はセリアリズムのアイデアに深く関わったこと。デュティユーにおけるシステムと自由の問題は12音音列をピッチ構造の母体としていかに柔軟に使用するかという問題に帰着すること。上記5つの作品は、同問題への準備、着手、発展的解消の記録して読み解くことができること。

研究成果の概要(英文)：Going back and forth between sketch studies and theoretical examinations of Dutilleux's five orchestral works, I obtained three major results that have the potential to modify the composer's former public image as an independent musician: (1) Dutilleux engaged in the Serialist movement more seriously than hitherto believed; (2) Dutilleux's dialectics of control and freedom in the composition were manifested most apparently in his idiosyncratic use of the twelve-tone row as a matrix from which can be generated various pitch structures; (3) Dutilleux developed progressively his dodecaphonism through the above-mentioned five works. After some trials in Second symphony, he invented his proper method of using the twelve-tone row flexibly in *Metaboles* and in *Tout un monde lointain*, and he arrived at a new form of free writing in *Timbre, Espace, Mouvement, Mystere de l'instant*.

研究分野：音楽学

キーワード：デュティユー セリアリズム スケッチ研究 自費譜 20世紀音楽 音楽理論 音楽分析

1. 研究開始当初の背景

デュティユーを性格づけるのに、いまなおもっとも多く用いられるのが「アンデパンダン *indépendant* (独立者の)」という形容詞である。そして、この「アンデパンダン」には、多くの場面で、とくにセリアリズムからの独立という意味が込められてきた。

セリアリズムとは、ブルーーズを旗手として1950-60年代に隆盛をみた20世紀音楽の一潮流である。そして、同時代の多くの音楽関係者は、このブルーーズの政治力の及ぶ限りにおいて、デュティユーの音楽がフランスの現代音楽シーンから排除された時期があったことを記憶している。しかし、そのような感情的なトラウマを背景として、デュティユーを単純に反セリアリズムに位置づけたり、さらには、デュティユーをセリアリズムを特徴づけたシステム思考と無縁の位置に置いたりすることは、明らかな勇み足であった。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、20世紀には調性にかわる新たなシステムへの希求が広く存在していたことを認識したうえで、デュティユーの創作を、システムと自由、あるいは計算と自発という、ポスト調性音楽における一般的な問題意識から問い直すことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究代表者は今回の研究を開始するに先立って、ヴァイオリンと管弦楽のための《同じ和音にもとづいて》でパイロット研究を行い、そこには6音旋法(ヘクサトニック: 移高可能性は4)、8音旋法(オクタトニック: 同3)、9音旋法(エニアトニック: 同4)、12音旋法(ドデカトニック: 同1=移高不可能)の4つの旋法の相互変換システムが働いていることを発見していた。

しかし、それ以上に興味深かったのは、本研究代表者の理論研究が導き出した通りのシステムが働いているとするならば、《同じ和音にもとづいて》の出版譜には明らかに「間違っただけ」が含まれていることに気づいたことだった。

真偽を確かめるため、2013年3月、バーゼルのパウル・ザッハー財団 Paul Sacher Stiftung に最初の訪問をし、この作品の自筆譜(浄書)を確認すると、いま問題にしている音は(出版譜にある「レ」ではなく)申請者の理論=システムが予測する通りの「ラ」であった。

本研究代表者はその後も、2013年8月、2014年3月と同財団を訪問し、同様の例を複数発見した。ここに、デュティユーのシステム思考を裏付ける事例が再び得られるとともに、デュティユーの音楽言語の理論研究の成果

を自筆譜研究において再検証するという循環的手法が見出されたのである。同時に、理論=システムによっては説明できない音、理論に抵抗する音が残りつづけることも分かった。とするならば、この作業こそが、システムと自由、計算と自発の境界を見定める試みとなることに思い至った。

4. 研究成果

(1) かくして本研究では、パウル・ザッハー財団に自筆譜が所蔵されている作品のうち、豊富な草稿が残されている以下の5つの作品を中心に、上記の方法で研究することにした(丸括弧内の数字は作曲年。それに続く数字は保管されている草稿の頁数)。

《交響曲第2番》(1955-59): 114頁
《メタボール》(1959-64): 69頁
《遙かなる世界が》(1967-70): 58頁
《音色・空間・運動》(1976-78/90): 45頁
《瞬間の神秘》(1985-89): 41頁

本研究が進行するにつれて明らかになったのは次のことである。

①これまでアンチ・セリアリストと見なされてきたデュティユーがセリアリズムのアイデアに深く関わっていたこと。

②また、デュティユーにおけるシステムと自由の問題は、12音の一定の配列(すなわち12音音列)をピッチ構造産出の母体としていかに柔軟に使用するかという問題に帰着すること。

③そして、中心的な研究対象とした上記の5つの作品は、同問題への準備(《交響曲第2番》)、本格的な着手(《メタボール》《遙かなる世界が》)、そしてその発展的解消(《音色・空間・運動》《瞬間の神秘》)の記録として読み解くことができること。

この結果、「伝統の破壊者(セリアリスト)」対「伝統の擁護者(デュティユー)」というジャーナリスティックな図式の無効性が明確となり、デュティユーがセリアリストたちと同じ問題に取り組み、おそらくは本人も意識しないまま、かなり似通った解決策を取るにいたったことが確認された。

(2) 同時に、この研究成果を4度の学会発表ならびに3つの雑誌論文で言語化する際に、デュティユーにおけるシステムと自由の問題を論じるには、常に用語上の困難が伴うことも認識されることとなった。

デュティユーが彼自身のセリエルを実現していくのは主としてピッチ(音高)の領域であり、その意味では彼は「ドデカフォニスト」であった。しかし、この彼自身の音高のセリエルは、レイボヴィッツによってテキスト化されてフランスに移入されたシェーンベ

ルクのセリエルとはかなり様相が異なるゆえに「ドデカフォニスト」の集合イメージからははずれてしまう。実際、デュティユーのセリエルは技法的にはブルーゼに代表されるフランスのセリエルにずっと近く、その意味では限定的ではあれ「セリアリスト」と呼ばれる存在である。しかし、デュティユーは、音高以外のパラメーターにセリエルの発想を積極的に適応したわけではないために「セリアリスト」の集合イメージからははずれてしまうのである。

本研究代表者は、極めて自由にではあれ「12音の一定の配列」をピッチ構造産出の母体として使用するという意味で、現時点では、デュティユーの創作を「ドデカフォニズム」の実現形態のひとつとして記述することを選択している。

(3) 本研究の成果のなかでもっとも具体的なのは、デュティユーの音楽において12音の一定の配列からあるピッチ構造が産出されるプロセスを、複数の理論モデルを援用して記述しえたことである。もちろん、それは理論仮説であるけれども、現時点で残存する資料と矛盾していない。

① 《メタボール》の第3セクション〈オブセッションネル〉の例で見てみよう。デュティユーはこのセクションのために次の12音音列を設定している。



いまこれを数字表記(Cを0として、半音高くなるごとに1ずつ増やした数字を割り当てて表記)に置きかえたうえで、同音列の12×12マトリクスを作成すると次のようになる。

	I_4	I_3	I_9	I_8	I_2	I_1	I_7	I_6	I_0	I_{10}	I_5	I_{11}	
P_4	4	3	9	8	2	1	7	6	0	10	5	11	R_4
P_5	5	4	10	9	3	2	8	7	1	11	6	0	R_5
P_{11}	11	10	4	3	9	8	2	1	7	5	0	6	R_{11}
P_0	0	11	5	4	10	9	3	2	8	6	1	7	R_0
P_6	6	5	11	10	4	3	9	8	2	0	7	1	R_6
P_7	7	6	0	11	5	4	10	9	3	1	8	2	R_7
P_1	1	0	6	5	11	10	4	3	9	7	2	8	R_1
P_2	2	1	7	6	0	11	5	4	10	8	3	9	R_2
P_8	8	7	1	0	6	5	11	10	4	2	9	3	R_8
P_{10}	10	9	3	2	8	7	1	0	6	4	11	5	R_{10}
P_3	3	2	8	7	1	0	6	5	11	9	4	10	R_3
P_9	9	8	2	1	7	6	0	11	5	3	10	4	R_9
	R_4	R_3	R_9	R_8	R_2	R_1	R_7	R_6	R_0	R_{10}	R_5	R_{11}	

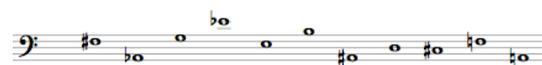
これを水平に左から読めば正行音列(Prime)とその移高形、水平に右から読めば逆行音列(Retrograde)とその移高形、垂直に上から読めば反行音列(Inversion)とその移高形、垂直に下から読めば逆行反行音列(Retrograde-Inversion)とその移高形になっている。

このマトリクスに練習番号28の音楽を写し

取ると、この部分のピッチ構造は、網掛け反転された部分として現れる。すなわち、この部分のピッチ構造は、もとの音列(P_4)に、その7半音上(P_{11})、2半音上(P_6)、9半音上(P_1)、4半音上(P_8)、11半音上(P_3)の5つの移行形を積み重ねて産出されたことが見てくる(譜例は著作権の関係でここには掲載できない。[雑誌論文]①を参照のこと)。

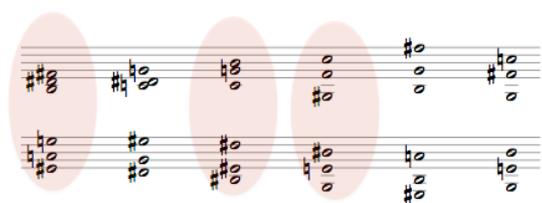
これはもっとも単純な例であるが、結果する和声的響きがダイアトニック的であることは興味深い。というのも、もとの音列自体が2つの4度あるいは5度サイクルを組み合わせるものであり(すなわちE-A-D-G-C-FとD#-G#-C#-F#-B-E。ただし後者の最後の2音は、12音音列を得るために修正されている)、ダイアトニック的な響きを内包していると理解されるからである。12音音列とそこから産出されるピッチ構造とは、まさしく響きのうえで関係しているのである。

②次に《遙かなる世界が》を見てみよう。デュティユーがこの作品のために設定した12音音列は次のものである。これは同作品の第1セクション〈謎〉で提示される。



《遙かなる世界が》では、これを母体に様々なピッチ構造が産出されるが、興味深い例(そして、スケッチから一定の裏付けの得られる例)が2つある。

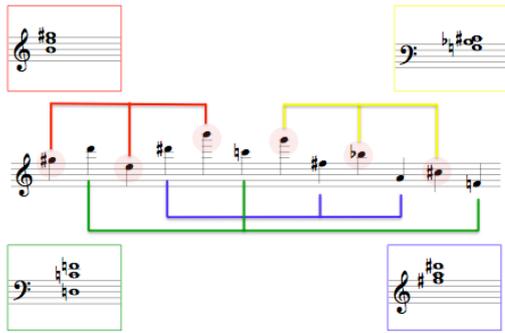
ひとつは《遙かなる世界が》第4セクション〈鏡〉の例で、ここでは、この12音音列の最初の5音(C-F#-A♭-G-E♭)ならびに第7音(B)からなる6音セットが、この音列自体の「和声的特質の要約」と捉えられ、まずは以下のように、その全転回形がリストアップされる。



そして、これらの比較検討の結果として、うち3つが選出される(網掛けをしたもの)。

〈鏡〉冒頭の伴奏和音は、これら3つの和音を連結した結果として現れてくるのである。

もうひとつは《遙かなる世界が》第2セクション〈眼差し〉の例で、ここでは第1セクション〈謎〉で提示されていた12音音列の第8移高形を出発点に、それを第1音からひとつ飛ばしに読むことで長三和音(下図の左上)、減三和音(下図の右上)が得られる。また、残りの6音を3音ずつに分けることで、さらにもうひとつの減三和音(下図の右下)と別の三和音(下図の左下)が得られる。



〈眼差し〉を開始する息の長いフレーズを伴奏する和音は、これらが対角線的に組み合わせられた結果として理解されるのである。

また、《遙かなる世界が》の12音音列を和声的特質の面から見直してみると、ここに特に第8移高形を出発点としたピッチ構造の産出が行われる理由も見えてくる。



《遙かなる世界が》のもともとの12音音列(P₀)の最初の9音はエニアトニック・コレクション(メシアンの第3旋法と同じ音集合)を構成しており、4半音上に移高されても(P₄)、8半音上に移高されても(P₈)、その内容に変化がない。つまり、音集合としては同じ和声的特質を維持しつづける。それゆえに、デュティユーはもともとの12音音列(P₀)が提示される第1セクション〈謎〉につづき、この第2セクション〈眼差し〉でその第8移高形から自分の望むピッチ構造を産出することで、セクション間の連続性を確保したと見ることができる。

(4) 以上、《メタボール》と《遙かなる世界が》において、12音の一定の配列からあるピッチ構造が産出される具体例を示した。ここでは、レイボヴィツを介してフランスに移入されたシェーンベルク由来のドデカフォニズムとは一線を画する音列操作、むしろ、ブーレーズが「セリアリズム」の名のもとに発展させたものに近い音列操作が、明らかに見て取れる。その後、デュティユーはさらに音列を柔軟に扱うようになっていき、もはやシステムと自由の境界線を設けることに意味のない地点へと向かっていく。

これについては〔学会発表〕④において、その最初の論証を行い、当該領域の権威たちから貴重な示唆を受けた。《音色・空間・運動》での具体例とともに、近いうちに論文として発表すべく、現在、準備を進めている。

発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① Fujita, Shigeru, Henri Dutilleux' s dodecaphonism in *Métaboles* and *Tout un monde lointain*, Université de Strasbourg, 査読あり、2018 (近刊)
- ② 藤田 茂、アンリ・デュティユーの12音技法受容：スケッチを活用した《メタボール》と《遙かなる世界が》の分析を通して、東京音楽大学大学研究紀要、査読なし、42巻、2018 (近刊)
- ③ 藤田 茂、アンリ・デュティユーのドデカフォニズム：《メタボール》のスケッチの考察を通して、東京音楽大学大学研究紀要、査読なし、40巻、2016、75-97

〔学会発表〕(計4件)

- ① Fujita, Shigeru, Beyond "la technique de douze sons": Dutilleux' s free writing in *Tout un monde lointain* and *Timbres, Espace, Mouvement*, Tracking the Creative Process of Music, 2017
- ② Fujita, Shigeru, Henri Dutilleux' s dodecaphonism in *Métaboles* and *Tout un monde lointain*, 9th European Music Analysis Conference, 2017
- ③ Fujita, Shigeru, Not a serialist, but a dodecaphonist: A sketch study of Henri Dutilleux' s *Second Symphony*, *Métaboles*, and *Tout un monde lointain*, International Musicological Society, 20th Quinquennial Congress in Tokyo, 2017
- ④ Fujita, Shigeru, Henri Dutilleux' s incorporation of serialism into his harmonic language: An examination of the sketches related to *Metaboles*, Tracking the creative process in music 2015

〔その他〕

アンリ・デュティユー生誕100年：鳴り響くイマージュ。

招待出演. 藤田 茂. ミュージック・バード (ラジオ), 2016年1月31日放送.

研究関連 Web ページ (1)

<https://tokyo-ondai.academia.edu/ShigeruFujita>

研究関連 Web ページ (2)

<https://researchmap.jp/read0064298>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 茂 (FUJITA, Shigeru)

東京音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：30466974

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4) 研究協力者

なし ()